

未明童話の本質

—「赤い蠟燭と人魚」の研究—

上 笙 一 郎 著



上 笙 一 郎（かみ・しょういちろう）

本名・山崎健寿

1933年2月16日生 埼玉県飯能市

1954年 文化学院卒

所属 日本児童文学学会理事

日本近代文学館博物館委員

日本児童文化館文芸委員

著書 童謡のふるさと（理論社）

日本の窓唄（三一書房）

日本の幼稚園（理論社）

児童文学への招待（編著・南北社）

未明童話の本質—赤い蠟燭と人魚の研究—

1966年8月5日 第1刷発行

著 者 上 笙一郎

発行者 井村 寿二

印刷者 岡橋 清治

発行所 勁 草 書 房

東京都千代田区神田駿河台2—3

振替 東京 175253

定価 850円

浩文社印刷・和田製本

乱丁本・落丁本はお取りかえします。

目次

I	最初の出逢い	一
II	これまでの評価	一五
III	そのモデル	四一
IV	ベックリン『波のたわむれ』	六三
V	越後高田・その一 ——人魚伝説——	七九
VI	越後高田・その二 ——蠟燭と岬と——	一〇七
VII	越後高田・その三 ——越後女性——	一二七
VIII	汎神論	一四五
附録	『赤い蠟燭と人魚』（初出本文）	一五九
	あとがき	一八〇

I
最初の出逢い

小川未明の童話における代表作をひとつだけ挙げよ——と言われ
たら、多くの人が、『月夜と眼鏡』『金の輪』『牛女』『港に着い
た黒んぼ』などと共に『赤い蠟燭と人魚』を挙げると思うが、わ
たしもまたこの作品を挙げたいと思う。この作品が未明童話の特質を
もっともよく体現しているという客観的な理由もあるが、しかしそ
れ以上に、この作品は、わたしという一個の人間にとって、或るか
けがえのない意味を持っているからである。

目を閉じれば、二〇年あまりの年月が過ぎ去った今でも、まるで
昨日のできごとであったかのように、鮮やかに甦えつつ来る。わた
しが『赤い蠟燭と人魚』を初めて読み、それまで無縁のものであっ
た文学的感動に激しく身心を揺さぶられたあの日は、わたしが小学
五年生になった晩春の一日——精確に言えば昭和一八年の五月一〇
日前後であった。

前月の四月二九日、当時まだ天長節と呼ばれていた天皇誕生日に、

わたしたち兄弟は父母に連れられて湘南の海へ遊びに出かけたが、江ノ島で海風に吹かれているうち、突然わたしは、高熱を發してしまった。その頃自分の家のあった東京まで帰り着くことができず、わたしは横浜で病院に入れられ、はじめは病名不明だったが、二、三日後になって急性肺炎と診断された。化学療法の高度に發達した現在でこそ、急性肺炎などたいした病氣ではないが、馬肉や辛子^{からし}の湿布ぐらいしか頼る方法がなく、しかもその馬肉や辛子もしいに手に入りにくくなっていた当時では、この病氣は、死病と言つてもさしつかえなかった。ただ、しあわせにもわたしの母は、田舎育ちに似ず病氣にたいして細心であり、高熱のわが子を無理に東京まで連れ帰ったりしなかったおかげで、わたしは危険ないのちを取り留めることができたのである。

一〇日間ほどで退院したあと、わたしは、たまたま横浜市 of 町はずれに住んでいた母方の伯母の家で、しばらく病後を養なうことに

なった。この伯母の家には、わたしと同じ年のようちゃんという少女がいて、学校から戻って来ると、寝ているわたしのために、自分の持っている本をかかえて来ては貸してくれた。どんな本があったのか、残念ながら今はもう覚えていない——ただ一冊、『赤い蠟燭と人魚』のおさめられていた未明の童話集を除いては。

その未明の童話集は、アルス児童文庫の第一六巻『日本童話集』の中篇で、『月夜と眼鏡』『飴チョコの天使』『月とあざらし』『港に着いた黒んぼ』、『二つの琴と二人の娘』『雪来る前の高原の話』『黒い人と赤い櫓』など計二一篇の短篇童話がおさめられており、装幀は恩地孝四郎、岡本帰一の口絵と挿絵で飾られていた。この小著の装幀に用いた人魚のイラストレーションは、じつはこのアルス児童文庫版のなかのものであって、忘れ難いままに敢えて使用してみたのである。

あらためて述べるまでもなく、アルス児童文庫は昭和二年から四

年にかけての出版であつて、その後再版されてはいないから、従姉妹のようちゃんの手持っていた未明童話集は、彼女がその父母から新刊書として買い与えられたものではない。おそらくは、十才の上も年令のちがう姉の財産であつたものが、末娘のようちゃんに引き継がれたものである。子どもの本というものは一般的に言つて消耗品であり、読者たる子どもが成人になると同時にその価値を失ない、廃品とされてしまうことが多いのだが、未明の童話集に関しては、それが財産として次の世代の子どもたちに受け渡されることもあつたのであつた。この受け継ぎに、第二次世界大戦前の時代における未明童話の古典的性格を見るといったら、言い過ぎであらうか。

それはともかくとして、ようちゃんから借りてこのとき読んだ未明童話集——もっと精確には『赤い蠟燭と人魚』は、わたしの全身全霊をとらえ、揺さぶり、血のような涙をしぼらせた。それは、わたしのかつて知らなかつた種類の感動であつた。

うねうねと果てしなくつづく暗い浪のかたに、わたしは、人魚の少女がさらわれて行く黒い船影を見、救いを求めて泣き叫ぶ彼女の声を聞いたように思った。しかし、物語の世界の住人でないわたしには、無残にも檻に入れられて南の国へ連れ去られる人魚の少女を、助けてやることは不可能なのだ。わたしは、ようちゃんに悟られないように、頭から布団をかぶって、声をおし殺して泣いた。そうして、泣いて泣いて泣きつくして、涙も出ないようにになると、それでようやく、薄幸な人魚の少女にたいする心の負い目が、いくらか軽くなったような気がしたのであった。

今日、児童文学の批評・研究という仕事にたずさわっているわたしの目からすれば、このときのわたしが『赤い蠟燭と人魚』から受けた身も世もあらぬほどの感動は、かならずしも正常なものではなかったと言わなくてはならない。というのは、この作品に接したときわたしの置かれていた場と状況が、わたしの日常のそれといたく

異なっていたからである。

ふだんの健康な状態のとき、住みなれた自分の家に在って読んだのならば、わたしは『赤い蠟燭と人魚』に、これほど興奮しなかったかもしれない。けれども、一時はその生命の安否さえ気づかわれたほどの病気のため、身心共に衰えて、すこしのことに感じやすくなっていたのに加えて、その病後静養の場が、初めて訪問したに等しい伯母の家であつたことが、わたしの気持をはなはだ不安定なものにしていた。見なれた自分の家を離れ、仔犬のようにその体臭をかぎ合っていた兄弟たちから遠ざかり、頼るべき父母の姿を見ることもなく、たったひとり、見知らぬ異郷にも等しい伯母の家に暮らさなくてはならなかったわたしには、母親の人魚から捨てられ、第二の父母ともいふべき蠟燭屋の老夫婦からも見はなされた人魚の少女が、他人とは思えなかった。わたしは、哀れな人魚の少女に、ひとりぼっちの自分の姿を確かに見たのだ。そして、そうであつた

からこそ、わたしは『赤い蠟燭と人魚』から深い感動を受け、涙のかぎりには啜り泣きしたのである。

しかしながら、かくして受けた『赤い蠟燭と人魚』の感動を、その当時のわたしは、何とかして忘れてしまおうと努力した。なぜならわたしは、他の多くのわんぱくどもと同様、女の子の読物である童話を読んで涙を流すなどということは、女々しいことの極致だと固く信じていたからである。

わたしの父は、旧中間層に属する職人から没落して労働者になった男であり、格別の教養も趣味もなく、したがってわたしの生活環境には、浪曲や歌謡曲などは氾濫していても、文学書があるということとはまず無かった。『のらくろ』や『冒険ダン吉』の漫画をどうやら卒業したその頃のわたしは、夜の目も惜しんで読みふけていたのは、講談社から出ていた「少年講談」シリーズで、この急性肺炎のときも、高熱のあまりのうわ言に、「仇は佐竹弾正ただひとり

だ。みんな、しっかりしろ——」と、塚原卜伝のせりふを口走った
りしたという。そのようなわたしであってみれば、『赤い蠟燭と人
魚』を読んで泣くなど、日本男子の面目にかけて唾棄すべき行為以
外の何ものでもなく、それでこの作品の感動を忘れてしまいたかつ
たのである。

なお、こうした事情のほかに、『赤い蠟燭と人魚』に集約的にあ
らわれている日本的近代童話の方法に、当時のわたしが慣れていな
かったということも、関係しているかもしれない。

それまでわたしが親しんできた漫画や少年講談のたぐいは、大衆
児童文学とでも称すべきものであって、登場する主人公は何かしら
超人的な力を持っており、その力を縦横に發揮して難局を切り抜け
て行くのが普通であった。よしんば超人的な力に恵まれていない場
合でも、何らかの奇蹟がおこって、危地にあった主人公は助かり、
その作品の結末においては、例外なく悪人ほろびて善人栄えるとい

うパターンになっていた。このような作品を読みなれていたわたしは、童話にせよ小説にせよ子どものための読物は、かならず善人榮えて悪人ほろびるものであるという観念を、いつか心に抱くようになっていたと言って過言ではない。ところが『赤い蠟燭と人魚』では、そうした約束が、もののみごとに無視されていたのである。

この童話のなかには、大衆児童文学におけるような意味合いでの主人公はいない。強いて言えば、人魚の少女が主人公であろうが、しかしこの主人公は、人を疑がうことすら知らぬ善意の心の持主なのに、というよりも、人を疑がうことすら知らない無垢な心の持主であるまさにその故に、売られて、遠い異郷へ追い遣られてしまうのである。

善人はいかなる危難に逢ってもかならず救われ、最後には幸福になるという、昔話以来の児童文学観念を抱いていたわたしには、この童話の主人公たる人魚の少女の運命は、暗くて、さびしくて、か

わいそうで、まともには見ていられないほど残酷なものであった。わたしが『赤い蠟燭と人魚』を、どうにかして忘れてしまいたいと思ったのは、大衆児童文学以外のものを知らなかったわたしが、日本的近代童話の真実に耐えきれなかったからであるという一面が、確かにあったと言うことができる。

だが、その理由はどうであらうとも、忘れようとすればするほど、『赤い蠟燭と人魚』は、いよいよ深くわたしの心に喰い入って来た。この童話が小川未明という作家のものであると知った中学生時代、わたしは未明の作品なら手あたりしだいに読みふけたが、それは、あの病後の一日『赤い蠟燭と人魚』におぼえた異常な感動を、ふたたび強烈に味わいたいがためであった。また二〇才頃には、意志して未明の世界と絶縁しようところみたこともあったが、しかしついにわたしは、未明から決定的に離れることはできなかった。

今わたしが、ここに、このようなかたちで『赤い蠟燭と人魚』の

研究書を出すのは、かつて少年講談ばかり読んでいたわたしが、とにもかくにも文学に開眼した日を、わたしなりに記念したいからにほかならない。けれども、のちに述べるようにこの童話は、小川未明という一個の童話作家の代表作であると同時に、近代日本の芸術的児童文学における最高度の達成という定評を得ている作品であり、その点を考慮に入れるならば、わたしのこのささやかなエッセイは、日本の近代童話そのものを究明することでもあると言って、決してまちがいでないのである。